蒼空高く翔ら

力は胸に溢れつつ

がら

がね

ある つくろふ思かな

暫しやすらふ楡の蔭 むと

遊子の真意君知るやいうし 迪を恵ねて辿りゆく 深き苦悩は身にあれど 若きに芽ぐむ数々のゕ゚ヸゕヸ

寮庭の桂も年ふりぬには、かつら、として、ないので、として五十年には、かって五十年にはます。 しょうねん 先がした 遺訓や永久に薫るらん への影とほけれど

茫々千里石狩 雪さんらんと散るところ われらが魂の故郷かな 野は澄みわたる銀の の

桜は 北溟城の生活にほくめいじょう いとなみ

相寄りむすぶ三百の 志は高きわれらかな と星の旗かざし

ほがらかになる楡の鐘 新月細くかがやけば のそが中に

朝曠野の露を吸ひ

<u>Ŧ</u>.

驚さる 夕北斗の囁きに き瞠る幼鵬の

清き 眸 君見ずや

六

理想の潮湧き出づる ゅうしほわ い はかなきものと誰かいふ うら若き日の悦びを

の海の高鳴るを 熊をはふりて饗宴せし 若き勇者よオキクルミ

東の空はかぎろひぬ 短檠すでに光消え

> 青き 煙 り かお けむり こよひ手稲に日は落ちて 九

長谷川吉郎 君 作曲 作歌

君

銀傷の酒つきざらんまとして、ままして、ままります。ままりません。 北斗の光かげさえて ああ碧落に永劫 0)